

一次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

早稲田

洋食の三点セットである、ナイフ・フォーク・スプーンは、いまではたいそう洗練されて、テーブルの飾りつけとしても華やかさをそえている。ほかのことについては不器用そのもののヨーロッパ人が、この三種の器具をたくみに操っているのを見ると、さすがに西洋文明が骨の髄までしみこんでいるなと、感心させられる。それにくらべると、幼時から箸でそだったわれわれは、どこことなく窮屈でどこもなく、とても手の一部になりきっているとはいいたい。

もともと、その食事器具がほとんどはみな、あたらしい西洋文明に属するといったら、驚きをよぶであろうか。ヨーロッパに太古からあったナイフをべつにすれば、スプーンとフォークはたかだか数百年の履歴をもつだけのことだ。フォークは、もつとも早くとれば十一世紀ころにヴェネチアで使用されはじめたというが、イタリアでひろくみられるのは十五世紀。そして、アルプスの北のヨーロッパでは十六、七世紀のことだ。

スプーンはこれまた、十五、六世紀になってつかわれる。もちろん、これに類する道具は古代からずっとあったけれども、食事用というよりは料理用。それに実用のものは、おおかた木製だったことだろう。いずれにしても、箸のように由緒ただしく、ながい伝統とはエンがうすい。

かつて、フォークとスプーンが出現するまえに、人びとはナイフだけで食事をさばいていた。テーブルの中央に盛られた丸焼き肉から、ナイフでそぎとった部分を左手にうけとった。そう、素手でたべたものだ。こんがりとした皮のこげ目や、したたりおちる脂と肉汁が、べつとりと素手についたことだろう。もちろん、このこつてりと汚れた手は、ズボンの脇か、上着の袖にこすりつけられる。

そういう様は品格に欠ける、手をぬぐうならナプキンをつかいなさいと、十六世紀の礼儀書が教えているけれども、どうも効き目にとばしかったようだ。何世紀ものちになってすら、貴紳淑女たちは、ジザイに屈曲する五本指の道具で、肉片を口にはこんでいた。使い勝手のわるい金属器具にみむきもしないで。

木鉢にそそがれた肉のスープは、どうやって飲むのか。ことはヨウイである。適度の大きさの鉢にいれかえて、あとは直接に口をつけてすすりこもう。回し飲みとあいなつたであろう。肉や野菜の具はどうしよう。ここでも指の応援がもとめられる。実際のところ、だれも不自由していなかった。

唯一の道具たるナイフは、必需品である。テーブルには一本もしくは数本のナイフがおかれることがあった。順ぐりにまわして、もしくは一家の食事であれば家父が權威をしめして手ずから、ナイフをふるって解体にかかったものだ。もつとも多くの場合、来客のときには、それぞれにナイフ持参を乞うのが正式だったようでもある。かくして、はなはだダイナミックな食事風景。ここでは、マナーもエチケットも、出る幕はない。

マナーどころではあるまい。ナイフはときおり武器になった。各自携帯の武器とあつては、人間もしばしば解体の対象となったことだった。平和が支配せずば、礼節ははるかに遠い。

フォークとスプーンの登場は、ひとに宿題を課した。ナイフがいささか狩猟経済をおもいおこさせるとすれば、フォークは、農業だ。フランス語ではフルシェットというが、これは熊手（フルシユ）の小さいものという意味である。農は勇猛よりも、順序だった配慮を必要とする。そしてスプーンのフランス語キュイエルは、「かきあつめる」という動詞からきている。漁業だか商業をおもわせる。これこそ、熟練した操作術のたまものだ。

べつの見方をすれば、食事には人間の肉体能力のいくつもの種類が動員されだした。ナイフは歯の代用品だった。そこへ、指の代用品たるフォークがはいってきた。指でとりわけろという。そしてついには、掌のかわりとして、スプーンが。上手にスープをすくいとることができるだろうか。

とたんに規制が出現する。ヨーロッパにブルジョワが姿をみせるころ、十八、九世紀に食事作法は微に入る。われわれ日本人が、欧風として理解するのは、このがんじがらめの規約集のことだ。脂と汁とで衣服をよごさぬようになったかわりに、緊張が君臨することになった。

だが、そのおかげで、食卓が平和になったことはたしかだろう。ナイフの刃傷沙汰は減った。より洗練された道具たるフォークとスプーンの仲間入りで、ナイフの切れ味もにぶってしまったからだ。

しかもさらに、食卓の平安を保証しようと、器具同士がぶつかりあう音をきびしく禁じた。それはこういいうきさつからだと思像される。そもそもヨーロッパ人は、器具に悪霊をみぬいている。人間が好みのままにつかっているうちは

早稲田

いいが、いったん器具がふれあつて自前の音声を発するようになつては、悪霊は空間にはなたれることになる。ガチャガチャとナイフやフォークがぶつかりあう音は、不吉このうえもない。食卓の秩序をみだす闖入者なのだ。だからいまもお、ヨーロッパの食事動作のうち、ナイフとフォークで音をたてるのは、最悪の振舞である。チューチューとスプーンをすすつて、スプーンに音を発せしめるのすら、禁じられる。

会食中のヨーロッパ人があんなにも、陽気に騒々しく談笑しているというのに、器具の音だけを嫌うのは、静寂を保つためではない。器具の発声が平和を破ると信じているためだ。馴れぬ道具をわたされて、あつかい悩む人びとにとつて、食卓の平和を維持するのは、ほんとうに気づかれのすることだった。

マナーは空から降ってきたのではない。それぞれの文化のなかで、価値観や世界観にもとづいて生みだされるものなのだから。

（樺山紘一「中世の路上から」より）

問1 ―― 線 a・c のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 本文中から次の一文が抜けています。どこに補つたらよいですか。最もふさわしい箇所を探し、すぐ前の文の終りの五字を書き抜きなさい。

手の延長として駆使するための技術的訓練を。

問3 ―― 線 X・Y のことばの意味として最もふさわしいものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

X 骨の髄までしみこんでいる

A 洗練されている

I しつかり身につけている

U 味わい深くなる

E 高度な段階に達している

Y 微に入る

A 細くなる

I 知れわたる

U 高級化する

E 習慣となる

問4 ―― 線1「スプーンとフォーク」がもたらしたものは何ですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

A 狩猟経済とマナー

I 文明と悪霊

U 品格と礼節

E 平和と緊張

問5 ——線2「人びとはナイフだけで食事をさばっていた」とありますが、その食事風景はどのようなものでしたか。その説明としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 素手も使った素朴なもの
イ ダイナミックで危険なもの
ウ 脂と汁で衣服を汚す不作法なもの
エ 新しい西洋文明の中心となるもの

問6 ——線3「こういういきさつ」とありますが、それはどのようなことですか。解答欄に合うように文中のことはを用いて三十字以上、四十字以内で書きなさい。

問7 「箸」の作法や「ナイフ・フォーク・スプーン」の作法の根本にあるものは何ですか。それを含む一文として最もふさわしいものを探し、初めの五字を書き抜きなさい。

二次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

この文章は、赤川次郎の小説『ふたり』の一節です。

主人公「実加」の姉「千津子」は、一年ほど前に事故死しました。その後、「実加」の頭の中には「千津子」の声が聞こえてくるようになり、奇妙な共同生活が始まっています。

「真子」は「実加」の親友ですが、彼女も数か月前に父親を病気で失いました。「北尾」は「実加」の父、「治子」は母です。

「実加だ！」

前の走者に遅れること、せいぜい十五メートルぐらい。実加は、まるで短距離でも走っているような勢いで、駆けて来た。

「凄い！——実加！ 頑張れ！」

真子が飛び上がるようにして叫んだ。

クラスの子たちがざわついた。——実加が顔を遠くから見ても分かるくらい真っ赤にして、走って来る。

「抜くよ、実加。——やった！」

大騒ぎになった。実加が一人抜いたのだ。トップの方の何人かがゴールインするまでは見ていた生徒たちも、¹もう何となくおしゃべりしながら、という感じだったのだ。

それが、実加が一人抜いて、さらにもう一人の走者にぐんぐん迫っているので、急にワーツと沸いた。

「実加！——もう少し！ 頑張れ！」

真子が叫ぶ。

——治子は、この光景を、前に見たことがある、と思った。そう、千津子の高一の時、あのゴールインは、ちょうど今とそっくりの騒ぎだったのだ。

「実加……」

治子は、必死で走って来る実加を見て呟いた。すると、急に視界が曇った。涙が溢れてきたのだ。

「——やった！ やった！」

真子が飛びはねた。「二人抜いた！ 実加！」

治子はあわてて目をこすった。実加はもうゴールインして、汗で顔を光らせながら、息を切らしている。

真子が駆け寄る。クラスの、他の子たちも。実加の姿は、たちまち埋もれて見えなくなった。

治子は、夫の方を見た。夫も、指で目頭を拭うところだった。

「あなた……」
「うん。——千津子を思い出した」

「私も」

二人は、じっとその場にたたずんだまま、クラスの子たちに胴上げされる実加を眺めていた……。

早稲田

「やったね」

と、真子が、ボンと実加の肩を叩く。

「マコがあんだけ、差をつめとってくれたからよ」

「それにしたって、百メートルはあったよ。いつの間に、²実加、あんなに走れるようになったの？」

「あら、知らなかったの？」

「何を気取ってんだ」

二人は一緒になって笑った。

「おい、早く食べないと、さめるぞ」

と、北尾が言った。

「はい。マコ、取りに行こうか」

「うん。待つて。——これ、食べちゃう」

皿を空にすると、二人は一緒に席を立った。

——夜、お祝いに、というので、北尾家の三人、そして真子と真子の母親の五人で、ホテルのバイキング料理を食べに来たのである。

「よく食べること、あの子」

と、真子の母が言った。「いつも小食なんですよ」

「いや、今日のあの頑張りなら、これぐらい食べて当たり前でしょう」

と、北尾が言った。

「——実加ちゃんのおかげで、あの子もずいぶん元気になりました」

「それはこちらだって……」

と、治子が言った。「千津子が事故にあった時には——」

何となく言葉が途切れて、少ししてから、真子の母が言った。

「子供って、本当にたいしたものですね。昔は私も子供だったなんて、信じられないみたいだわ」

その子供たちは、一つの皿に何種類の料理を取り分けられるか、競っているところだった。

「この料理全部、少しずつ取って並べよう」

と、実加は頑張っていた。

「ソースが混ざって、おいしくないよ」

と、千津子が言った。

「いいの。お姉ちゃんが食べるわけじゃないんだから」

実加は、せっせと皿に並べて行く。

「——よく頑張ったわね、今日は」

と、千津子が言った。「何事も、あきらめなきゃ、やりとげられるのよ」

「お姉ちゃん語録？——だって、いくら何でもビリじゃね。またお姉ちゃんと比較されちゃうし」

「へえ。意識してんだ、一応」

「そりゃね。でも——」

ふと、料理を取る手が止った。

「どうしたの？」

「ううん……」

実加は首を振った。——お姉ちゃんは高校二年までしか生きなかったんだ。

でも、私が来年高校一年になり、二年になり……。三年生になったら、私はお姉ちゃんを追い越してしまうことになる。

それでも、お姉ちゃんはずっと私の中にいてくれるのかしら？

そんなこと、考えたこともなかったのだが、今、そう思い付いて、不安になったのである。

「おっと」

誰かにぶつかりそうになった。

「あ、すみません」

と、言って顔を見る。

あれ？——どこかで見たことのある男の子だった。男の子といったって、実加より少し背が高い。高校生ぐらいか。

「何だ、今日の駅伝で」

と、その男の子の方が、気が付いたらしい。

「あ、前田さんのお兄さんだ」

と、実加も思い出した。

同じクラスの子の兄だ。確か高校一年である。

「凄かったな、追い込み」

「どうも。——みんな一緒ですか」

「うん。向うのテーブルに」

「私、長谷部さんたちと一緒に。その向うのテーブル。全然気が付かなかった」

「実加。どうした？——あ、前田さんのお兄さん」

と、真子がやって来る。

「やあ。——じゃ」

女の子に挟まれて、何だか照れたのか、その男の子は、皿を手を席へ戻って行った。

高一にしては少し小柄だが、

「結構いい男でしょ」

と、真子が言った。

「そう？」

「好みじゃない？ 私、ああいうタイプがいいの。あんまり優等生じゃないみたいだけどね」

実加は、何となく、その男の子を見送っていた。

「実加、いくつお皿に取った？」

訊かれて、実加はふつと我に返ると、

「まだ、これからよ。見てなさいね」

と、料理の方へと注意を戻したのだった。

と、料理の方へと注意を戻したのだった。

と、料理の方へと注意を戻したのだった。

問1 「千津子」との会話の世界に入り込んでいた「実加」は、突然、現実へと引き戻されています。それはどこから

ですか。初めの五字を書き抜きなさい。

問2 ——線1「もう何となくおしゃべりしながら、という感じだった」とありますが、なぜ、そのようになっていた

のですか。理由としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見所は、もうないだろうと思っているから。

イ 上位の勝敗結果が、すでに決まっているから。

ウ 勝ち負けには、もともとこだわっていないから。

エ 下位の方の選手には、たいして興味がないから。

問3 ——線2「いつの間に、実加、あんなに走れるようになったの？」とありますが、このように速く走れたのは、「実加」にどのような気持ちがあったからですか。解答欄に合うように、文中から十字以内のことを書き抜きなさい。

さい。

問4 ——線3「昔は私も子供だったなんて、信じられないみたいだわ」とありますが、なぜ、「真子の母」はこのように言うのですか。理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 大人の自分には、子供たちのようにつらいことからすぐに立ち直ることなどできないから。

イ 子供だったころ同じようなつらいことが自分にもあったが、それを思い出したくはないから。

ウ つらいことを忘れて何かに夢中になるということを、子供のころの自分は経験していないから。

エ 励まし合いながら共につらいことを乗り越えてゆけるような友人に、今まで出会ったことがないから。

問5

「実加」の「千津子」に対する思いとして最も強いものを次から選び、記号で答えなさい。

ア いつまでも自分を見守り、支え続けてほしい。

イ もうこれ以上、自分にまとわりつかないでほしい。

ウ 自分だけではなく、父と母の悲しみも取りのぞいてほしい。

エ 会話していることを、ふたりだけの秘密にしておいてほしい。

問6

「前田さんのお兄さん」の登場は、どのようなことを印象づけていますか。解答欄に合うように、十五字以上、二十字以内で書きなさい。ただし、次の二つのことばを必ず用いなさい。

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

実加 千津子

〔以下 余白〕